企画展「『京都盲啞院』 発！ 障害のある子どもたちの教育の源流」

竹村 佳子*

京都市学校歴史博物館

I. はじめに

京都市学校歴史博物館（以下、当館）は、少子化により閉校となった京都市の小学校が所蔵する教育資料や美術品などを保存・公開する施設として、平成10年11月に、元京都市立開智小学校の校舎を利用して開館した。明治2年に開校した、日本で初めての学区制による64校の番組小学校（町組ごとにつくられた町組会所兼小学校）をはじめとする京都の教育の歴史を常設展示し、あわせて、年に4回企画展を開催している。

今回報告する当館の企画展は、日本で最初につくられた視聴覚障害児のための学校「もう あいん盲啞院」の貴重な資料約150点を、京都府立盲学校及び京都府立聾学校から出品していただき、なぜ全国にさきがけて京都に障害児教育が始まったのか、また、その熱意と工夫を伝えるものである。

II. 京都における障害児教育のはじまり

明治2年に開校した番組小学校のひとつ、上京第十七番組小学校（明治5年に上京十九区小学校、明治8年に待賢小学校と改名）の教師であった古河太四郎は、地域の代表者であった熊谷伝兵衛とともに聴覚障害のある姉弟に教育をはじめめる。これを「いん あきょうじょう瘡啞教場」と名づけ、後に視覚障害児も迎え入れて、当時の小学校のカリキュラムにそった教育に取組む。この成果の一つとして、盲啞院の開業式に生徒や地域の代表者に「しゅざんほうりやくず手算法略図」(図1)と「いん あしゅせい こじゅうおん瘡啞手勢五十音」(図2)そして「盲啞教授課業表」(図3)が配られた。また、開業式直前の明治11年5月、待賢小学校の地域から、教具類144点が盲啞院に寄付された。これらは障害児教育用の珍しい器械（当時は教具をこう呼んだ）であり、御苑内の博覧会（明治5年から官民協同で創設した京都博覧会社によって京都

御苑内で催された博覧会。明治11年には第7回を数え、日本全国から珍しいものが出品された。）に展示されたという¹⁾。

図1.「手算法略図」明治11年 京都府立盲学校蔵

図2.「瘡啞手勢五十音」明治11年 京都府立盲学校蔵

*Yoshiko TAKEMURA: 〒600-8044 京都府京都市下京区御幸町通仏光寺下ル橘町437（元京都市立開智小学校）。

Tel.075-344-1305 Fax.075-344-1327（2008年2月29日 受理）

[illegible]

図3.「盲啞教授課業表」京都府立盲学校蔵
明治11年から明治15年まで使用

Ⅲ. 盲啞院の教育と運営

64校の番組小学校は、地域の力で運営されていたが、盲啞院もまた、寺社や町衆の寄付と、それぞれの番組（自治組織であった町組を編成替えしたもの。明治5年に区と名称が変わり、明治25年から学区と呼ばれた）から毎月1円を徴収して、生徒からは授業料を取らなかった。そして、生徒の送り迎えをスクールバスならぬ人力車でいった。「盲啞院」の旗を掲げ、京都の街を走る人力車は、四条大橋の通行料が免除となり、さぞかし人々の話題となったであろう。

1. 工夫された教育方法と教具類

この企画展のおおきな見所は、古河太四郎らが行った教育と、工夫を重ねた教具類である。明治期、番組小学校では直感教授法の考えにのっとり、多くの教具を地域の寄付によって揃えていた。この方法は、視覚障害児が様々な物を触って感覚を養い覚える教授法と共通する。「木刻凸字」や「凸形京街図」「凸形地球儀」(図4)はいずれも明治10年代前半に製作されたもので、当時

図4. 「凸形地球儀」明治13年 京都府立盲学校蔵

の木彫や模型作りの技術の高さに驚く。教育を施そうとする意思と、それを支える文化が整っていたのが京都であった。また、溶かした蠟を箱に入れて、柔らかいうちにへらなどで文字を書かせ、固まった後で触り、書いた文字を確認させる「蠟盤文字」の方法で、画数の多い文字を習得させた。掌に爪を立てて文字を描く爪尖画つめさき がしやう 掌ゆうびさき法、背中の背骨の左右に漢字のツクリとヘンを描く指尖ゆびさき法はいしやほうなど、様々な工夫のあとが見受けられる。

古河太四郎は、室内に引きこもりがちな障害児に、外で遊びながら学べる遊戯物を考案し、親戚の絵師であった有馬孝山に図を描かせて遺している。4種の幅の異なるコースをつくり、間の杭に鈴を付けて、視覚障害児がまっすぐ歩く練習ができる「ちようこうれんしやうじやう直行練習場」、渦巻状にコースを作って、風の向きや光の向きが変わることで方向感覚を養う「ほうこうかんかく か せんじやう方向感覚渦線場」、まりを投げて吊り下げた太鼓や鍋などに当てて音を聞く「だきやうちやうおんじやう打毬聴音場」。この3図が1幅の軸となっている。一方、聴覚障害児のための遊戯は、集中力とまりを投げる運動を目的にしている。丸い輪のなかにまりを投げ通す「だきやうかん わ き打毬貫輪器」や、物の名前を書いた札にまりを当て、当たればその物の絵が描かれた札が落ちてくる仕掛けの「たん ご す あわせ単語図合」。この図が描かれた「ゆう ほ じやう ゆう ぎ ず遊歩場遊戯図」は、現在、筑波大学附属視覚特別支援学校に所蔵されている。有馬孝山の筆によるもので、盲啞院から東京の樂善会訓育院（外国の宣

教師等の提起に応じて、京都の小学校創設の相談にも関わった中村正直等がつくった視覚障害児のための学校。明治13年2月私立学校として授業開始。同年6月に啞生も受け入れ、明治18年に官立模範学校となる。）に譲られたのであろう。また視覚障害児と聴覚障害児の教室での机の並べ方を描いた「盲啞教場椅卓整列図」は、細かな所にも、障害児の立場に立って考案する古河太四郎の姿勢が読み取れる。

2. 手勢の考案

聴覚障害児のために古河太四郎は「手勢」を考案した。聴覚障害者同士がコミュニケーションの手段として使用しているものを再編成し、口話と同時に使用するものであり、使用の心得は、事物を象徴し連合してゆく精神過程と身体運動を統合した「姿勢」である。発音は頭、視線、喉、肩の姿勢が強調され、眼力とともに「氣勢」であると説明している²⁾。寺子屋「白景堂」に生まれ、漢学に親しんだ古河太四郎の東洋的な感覚が現れており、明治8年、京都の幼稚遊嬉場の開業式で京都府の大書記官が「孟母三遷の教え」を述べ、小学校に「孟母断機図」が飾られていた当時の、東京にはない京都の町教育文化と共通する。「手勢教育」のなかには、現在の手話でも表しにくい「てにをは」、つまり助詞などの用法も決められ、また「画掌法」は、掌に動詞や形容詞などを表す方法として有馬孝山に描かせ、理解しやすくした(図5)。

図5.「画掌法図」有馬孝山 明治12年 京都府立聾学校蔵

3. 職業教育

盲啞院は、早期より職業教育を重視したことも大きな特徴である。「工学場」と称し、13歳以上の子ども（家

庭が貧窮している子どもは10歳以上）に、視覚障害児には「こより細工」「按摩」「琵琶」など、聴覚障害児の男子には「銅器彫鐫」(実際に使用した下絵を張り合わせた巻物が残っている(図6))、「和木指物」(さしもの)女子には「刺繍」を教えた。古河太四郎は障害者生活状況調査を行い、この結果に基づいた職種をそれぞれの障害児に教えようとした。この、いわゆる明治版作業場は、地域の人たちの協力で運営され、工学場で作られた製品は博覧会(前記した京都博覧会社によって開催されたもの)でも賞をとり、収益をあげ、後に設置された絵画科では、京都府画学校の望月玉泉が指導し、卒業生は各種展覧会に出品するなど大きな成果をあげたという³⁾。

図6.「銅器彫鐫原図」部分 明治14年 京都府立聾学校蔵

IV. 企画展の意義

今回の企画展は、盲啞院設立以前から明治22年京都市立盲啞院となった頃、古河太四郎が辞職した後、2代目院長鳥居嘉三郎が、盲部と聾啞部の分離独立を進言、さらに盲啞教育令の制定を建議するなど、発展した盲啞院までの歴史と教育内容についての展示とした。京都の盲聾教育130年の歴史のはじまりは、特に日本全国の盲学校や聾学校の開校と強く関わっている。盲啞院の卒業生や、盲啞院で教授法を学んだ教師達が、出身地に帰って盲聾学校を開校させた。また、京都盲啞院の同窓会が、各地にできた盲聾学校の教具を作って送るなど、指導的な役割を果たした。これはまさに全国の盲聾学校の源流である。

入館者は企画展の前に当館の常設展示、つまり日本で最初の番組小学校が京都で開校する経過とその状況を見ることによって、なぜ京都で早くに障害児教育の学校「盲啞院」が出来たのかを理解する。これが盲啞院の展覧会を当館で開催する最大の価値である。明治維新、都でなくなった京都の再生事業として、真っ先に小学校を64校創り上げた京都の教育奨励のエネルギーは、女子の教

育施設として女紅場（明治5年）を、幼児教育施設として幼稚遊戯場（明治8年）を全国に先駆けて創設し、障害児の教育も例外ではなかった。子どもが平等に学校に通えることを目指した明治初期の京都の人々は、障害児にも同じ環境を整えようとした。この熱意が伝えられるのは、当館をおいて他にはないだろう。

V. 最後に

この企画展には、各地域の手話サークルが団体で来て下さった。多くのサークルが活動されていることを改めて認識し、活動のなかに当館の見学を入れてくださったことは、大変嬉しい事であった。また、企画展開催期間中、所蔵者に許可をいただいて「展示物をさわれる日」として4日間、盲啞院の教具9種、京都市の学校で使われていた昔の教具類14種を別室に用意して、“説明を聞きながら昔の教具に触っていただく”イベントを催した。多くの視覚障害の方々は、主にこの日に来館して下さった。しかし、いつ来られても触ることが出来るレプリカを作製できなかったことは一番反省すべき点であった。

人間が直接サービスすることが、究極のユニバーサルデザインであると信じ、最寄バス停までの送迎や、「音声ガイド」機ならぬ職員ガイドでカバーしたつもりである。今後、今回の企画展の反省を生かして、あらゆる人

達に楽しんでいただける博物館を目指したいと思う。

引用文献

- 1) 盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会編集部会. 京都府盲聾教育百年史. 京都:盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会;1978.p.35.
- 2) 盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会編集部会. 京都府盲聾教育百年史. 京都:盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会;1978.p.23.
- 3) 盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会編集部会. 京都府盲聾教育百年史. 京都:盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会;1978.p.117-9.

参考文献

- ・ 盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会編集部会. 京都府盲聾教育百年史. 京都:盲聾教育開学百周年記念事業実行委員会;1978.
- ・ 京都市児童福祉史研究会. 京都市児童福祉百年史. 京都:京都市児童福祉センター ;1990.
- ・ 岡本稲丸. 近代盲聾教育の成立と発展: 古河太四郎の生涯から. 東京:日本放送出版協会;1997.
- ・ 加藤康昭. 日本盲人社会史研究. 東京:未来社;1974.
- ・ 中野善達, 加藤康昭. わが国特殊教育の成立. 東京:東峰書房;1967.
- ・ 鈴木力二. 古河太四郎と京都府盲啞院. 日本盲教育史資料; 第二集. 東京:あをい会;1968.